



新説!
白神
のいにしえ
—津軽ダム建設に伴う発掘調査成果とともに—

主催 青森県立郷土館 共催 東奥日報社 後援 西目屋村・西目屋村教育委員会 協賛 青森県埋蔵文化財調査センター

世界自然遺産だけではない白神山地

世界でも最大規模のブナの原生林が残されている白神山地は、世界自然遺産に登録されてから今年で25周年を迎えました。これまでは貴重な、また美しい自然環境が注目されてきた白神山地ですが、近年の発掘調査によって1万年以上の昔から人びとが暮らしてきた場所であることも分かってきました。今回の企画展では、白神の山の恵みによって生きてきた人びとを主役に据えています。これが「新説！」と題した大きな理由です。



暗門の滝 (第三)

一昨年、西目屋村に完成した津軽ダム。その建設過程では、従来の目屋ダム貯水池(美山湖)周辺にある17遺跡が発掘調査の対象となりました。平成15(2003)年から同27(2015)年にかけて青森県埋蔵文化財調査センターが行った発掘調査では、段ボール箱1万5千箱を超える土器や石器が出土したのです。遺跡の規模だけではなく、ダム周辺という限られた区域内で縄文時代草創期から晩期まで、縄文時代を通じて人びとの生活痕跡が見つかったことは大変な驚きです。

新説！白神のいにしえ

—津軽ダム建設に伴う発掘調査成果とともに—

◇開催期間：11月21日(水)～平成31年1月20日(日)

※12月29日～1月3日休館

◇開館時間：9:00～17:00

◇会場：特別展示室(大ホール)

◇料金

○11・12月 一般 310円(250円)

高校・大学生150円(120円)

○1月 一般 250円(200円)

高校・大学生120円(100円)

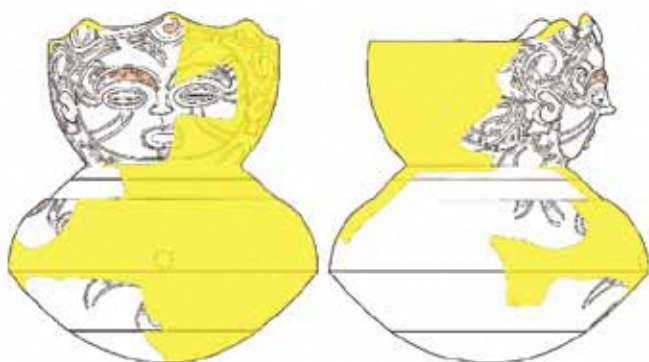
※()内は20人以上の団体料金。中学生以下は無料。障がいのある方、老人福祉施設に入所の方は観覧料免除。上記金額で常設展示もご覧になれます。

第1章 発掘された白神のムラ

津軽ダム建設に伴う発掘調査では、縄文時代草創期（約15,000年前）から明治時代までの遺物や遺構が発見されました。本章では発掘調査の概要を示しています。

人面付注口土器

冒頭に掲載した土器で、川原平(1)遺跡で出土しました。縄文時代晩期初頭（約3,000年前）に作られたもので、注ぎ口の付いた注口土器と推定されます。下図の黄色範囲は樹脂で復元した部分ですが、接合しない体部破片も出土しており、注口部が外れた後に補修したことを示す黒色物質が付着した破片も認められます。これほど精巧に作られた人面付土器が、ほかにあるでしょうか。



人面付注口土器模式図（左：正面、右：側面）

第2章 白神の遺跡と環境

遺跡で出土した化石などから白神山地の環境を説明しています。縄文人は拾った化石を「不思議な石」と考えて自分のムラに持ち帰っていたようで、いくつもの化石が遺跡から出土しました。

縄文時代の装飾品

白神山地で採集できる海産貝類の化石は、そこが海から隆起したことを端的に示します。その中に、キムラホタテというホタテガイの仲間の化石があります。写真は、水上(2)遺跡で出土した装飾品で、縄文人が凝灰岩を削って放射状に線を描き、穴を開けてペンダントのように仕上げています。形状からキムラホタテを模したものだと考えられます。



キムラホタテを模した装飾品
(青森県埋蔵文化財調査センター蔵)

展示に伴う再鑑定で、化石を利用したものではなく、化石を模したものであることが新たに分かりました。

第3章 白神の縄文と暮らし

発掘調査で出土した、縄文人の衣食住、あるいは彼らの人生を物語る資料で構成しました。

石棺墓（せっかんぼ）：石で組まれた墓

水上(2)遺跡で発見された、縄文時代中期の終わりごろ（約4,000年前）に作られた石組みの墓です。実際に使われていた石を使って復元しました。内寸はおおよそ2m×50cmで、最も大きな石の重さは87kgあります。同遺跡では、このような墓が県内最多の25基見つかっています。



展示室に再現された石棺墓

第4章 華麗なる白神の縄文

縄文の魅力あふれる優品を一堂に集めました。

大型遮光器土偶

川原平(1)遺跡で出土した、西目屋の「しゃちゃん」です。高さは26.5cmあり、頭や肩には赤色顔料が塗布されています。普段見ることの少ない背中側も観察できるように展示しました。



大型遮光器土偶
(青森県埋蔵文化財調査センター蔵、
写真撮影：小川忠博氏)

第5章 記録でたどる白神

歴史・民俗資料から白神山地に暮らした人びとの姿に迫ります。

特別公開① 『外浜奇勝』

『外浜奇勝』は、江戸時代後期の文人・菅江真澄が津軽各地を旅行した際の日記の草稿を、まとめてとじ合わせたものです。本品は、真澄の著作のなかで青森県内に存在する唯一の直筆本で県重宝に指定されています。**※展示は12月28日（金）まで。資料保護のため展示ページは不定期に変更しています。**



「あんもんのもろたき（暗門の諸滝）」

特別公開② 西目屋のこぎん

「こぎん」は津軽地方に伝わるさしこ着物の一種です。麻の着物に木綿の糸で刺しつづった模様が美しく、常設展でも人気があります。企画展では西目屋で作られたもの5点を紹介しています。これらは民俗研究家・故 田中忠三郎氏が収集したもので、重要有形民俗文化財に指定されています。

(学芸主査 岡本洋)



砂子瀬で作られたこぎん[大正～昭和初期]
(個人蔵・当館保管)

今後の関連行事

いずれも当館内で行い、申し込みは不要です。

【講演会】 聴講無料

- ・「いにしえの人と石－白神の遺跡群から－」
齋藤岳 氏（青森県埋蔵文化財調査センター）
12月16日（日） 13:30～15:00
- ・「縄文ムラの“大きな”建物
－公民館？首長の家？集合住宅？…－」
木村高 氏（青森県埋蔵文化財調査センター）
1月14日（月・祝） 13:30～15:00

【土曜セミナー】 受講無料

- ・「祭祀用具の変遷からみる
紀元前一千年紀の岩木川流域」
根岸洋 氏（国際教養大学）
12月22日（土） 13:30～15:00
- ・「縄文人と動物」
杉野森淳子（当館職員）
1月5日（土） 13:30～15:00

【ギャラリートーク】 当日の観覧券が必要

- ・12月16日（日） 11:00～11:30
最上法聖 氏（青森県教育庁文化財保護課）
- ・12月23日（日） 13:00～13:30
秦光次郎 氏（青森県埋蔵文化財調査センター）
- ・12月24日（月・祝） 13:00～13:30
杉野森淳子（当館職員）
- ・1月6日（日） 13:00～13:30
小山浩平 氏（青森県埋蔵文化財調査センター）
- ・1月13日（日） 13:00～13:30
荒谷伸郎 氏（青森県教育庁文化財保護課）
- ・1月14日（月・祝） 11:00～11:30
中澤寛将 氏（青森県企画政策部世界文化遺産登録推進室）
- ・1月20日（日） 13:00～13:30
葛城和穂 氏（青森県教育庁文化財保護課）

※津軽ダム建設に伴う発掘調査を担当した方々を講師に招き、実際に係わった資料を解説していただきます。内容は毎回異なります。

博物館評価に係わる資料 ～タイプ標本～

博物館は、資料収集・保存、調査研究、展示会教育普及など多種多様な活動を行っています。その中で一番の基本になるのは博物館資料です。どのような資料を収集し、調査研究をして、どのように活用、管理していくのか、このことがその博物館の評価の一端を担っています。

自然資料を例に詳しく見てみましょう。自然分野の資料は、自然界の仕組みや成り立ちを物語っており、自然を記録する重要な役割を持っています。自然資料は「一次資料」と呼ばれる標本が主です。この標本には、いつ、どこで、誰が、どのように採集したかについて質の高い情報が含まれており、環境遍歴を知る基礎的資料となっています。

自然資料は、個人コレクション（寄付資料）と調査資料（生産資料）が多くを占めます。特に個人コレクションについては、資料に関する価値観は個々によって異なりますが、資料蓄積や収集時間、そして努力が元になった収集活動により作られたものです。更に、標本以外のメモ、文献、ノートなどの資料（二次資料）も併せて寄贈いただいています。

これらの寄贈資料には、タイプ標本（新種記載に使われた標本）も含まれています。博物館評価にはこのタイプ標本の有無も大きな基準となります。

す。新種の記載には命名規約というものがあり、それによって命名されます。新種の記載をした研究者はそのタイプ標本を、「標本を維持管理し研究利用できる施設を持つ研究機関」に供託すべきとされています。タイプ標本は模式標本と副模式標本に大別され、一般には大学や博物館に保管されます。保管された博物館は保存管理が優れているという物証となります。当館には白神山地固有種の「*Orobolus yamauchii*」副模式標本や土壤昆虫の権威である内田一博士のトビムシなど、多くのタイプ標本が保管されています。

（学芸員 山内智）



ヒメセグロベニモンツノカメムシの副模式標本

力作537点 あふれる元気

11月2日（金）から11月11日（日）まで、「第86回東奥児童美術展」が開催されました。会場となった1階特別展示室（大ホール）には、県内の園児や小・中学生の豊かな想像力で描かれた図画・版画作品537点が展示されました。期間中に観覧に訪れた親子は、自分の作品の前で記念撮影をしたり、他の作品を見たりと楽しんでいました。

開催初日の2日（金）には青森市の青森藤こども園の園児27名が来館しました。先生と手をつなぎ、元気いっぱいに職員に挨拶をしてくれた園児たちは、自分の作品が展示されているのを発見すると「あっ、ぼくの描いた絵だ！」と大喜び。また、中学生の描いた絵を「これすごい！見て！」と、興味深そうにみんなで指さして鑑賞していました。

運動会や文化祭などの学校の行事、お父さんやお母さんと出かけたときの思い出など、子どもならではのテーマ・表現で描かれた作品は非常にみずみずしく、見ているとこちらまで元気になります。子どもたちには、作品を描いたときの気持ちを忘れずにこれからも健やかに成長してもらいたいと思います。

（TTHAグループ 櫻庭友輔）



お気に入りの絵を指さす園児たち

